

## 資料紹介

権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	ラテンアメリカレポート
巻	24
号	2
ページ	49-52
発行年	2007-11-20
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00006021">http://hdl.handle.net/2344/00006021</a>

## 資料紹介



山本昭代著『メキシコ・ワステカ先住民農村のジェンダーと社会変化 フェミニスト人類学の視座』明石書店 2007年 427ページ

本書では表題のテーマが、都市移民の増大、子どもに関わる変化(教育、産児制限、貧困対策事業など)、結婚の変化(事実婚の増大)、家の建築への女性の資金的貢献の増大、シングルマザーの存在に焦点を当てて記述される。こうした変化が、女性の位置(地位)をめぐる価値観、文化の変化という視点から既存研究の検討と合わせながら実証、考察される。

著者の関心は、子どもや女性に関する価値観、文化の変化に集中しており、それは単に事実の描写にとどまらない理論的な視角を持った接近を要請している。著者はそれをフェミニスト人類学として形を与えようとする。すなわち、フェミニスト人類学の視点として、変化の結果が女性に有利になったか否かという2项目的なアプローチを超えて、差異化をもたらす社会のあり方に注目することの必要性、そして、シングルマザーなどの少数派による社会的認知や権利獲得を、新しい規範の形成として少数派の視点からとらえる立場に立つことの重要性を強調するのである。

豊富な事実が丹念な調査に基づいて述べられておりさまざまな読み方ができる。例えば、ほかの変化の原因ともなっている重要なものの一つとして、女性が都市で労働し男性と同等の所得を得るようになってきたこと(経済的要因)があることが明瞭に示されている。

近年、人類学的研究は、伝統的共同体の維持のメカニズムから現代(外部)社会の影響による変化の過程に焦点を合わせたものとなりつつあるが、現代社会を支える価値観そのものが変動しつつあること(あるいは価値観を変革すべきであるという認識の存在)が、このようなフェミニスト人類学の出現を必然的なものとしているといえよう。

(米村明夫)



山本紀夫編『アンデス高地』京都大学学術出版会 2007年 xxxviii + 625ページ

アンデス高地と聞いて読者は何を思い浮かべるだろうか。マチュピチュの遺跡を残したインカ帝国、ジャガイモの原産地、葦の浮島に人々が住むチチカカ湖、高原で草を食べるリャマやアルパカ。富士山山頂を超える標高4000メートルの高地では、人々が農業や牧畜業を営み、高度な文明が発展した。本書ではこのようなアンデス高地を、民族学、人類学、地理学、家畜学、遺伝子学などさまざまな分野の専門家がわかりやすく解説している。

本書の魅力は、アンデス高地における人々のくらしを生き生きと描いている点である。編者を始め執筆者の多くがアンデス高地に長期間住み、その観察や体験に基づいて記述している。なかでもジャガイモ、キヌア、リャマ、アルパカなどアンデス特有の作物や家畜とその利用に関する説明は興味深い。ジャガイモはアンデス原産の植物で、寒さのためにほかの作物が生育できない標高4000メートル以上の厳しい環境の中でも栽培することができる。アンデスの人々はここで栽培した在来種のジャガイモを、昼夜の大きな気温差と乾燥した気候を利用して、チューニョという加工食品にする。チューニョは貯蔵や輸送に便利なだけでなく、加工の過程でジャガイモに含まれた有毒成分が取り除かれるという、アンデス高地の人々のくらしの知恵が詰まった加工食品なのである。

伝統的なくらしだけでなく、近年進んでいるグローバル化や市場経済化に人々がどのように対応しているかについても取り上げている。なかでもエクアドルのオタパロ族は、民芸品の行商のため世界各地へ出かけることで知られている。伝統を維持しながらも観光業を中心として経済発展を目指すたくましい人々の様子がよくわかる。

(清水達也)



オスカー・ルイス，ルース・M.ルイス，スーザン・M.リグダン著（江口信清訳）『キューバ革命の時代を生きた四人の男 スラムと貧困 現代キューバの口述史』明石書店 2007年 778ページ

本書は、1959年の革命直後の1960年代前半に、未だ革命成功の興奮さめやらぬキューバ・ハバナで貧困地区の人類学的フィールド調査を行った、オスカー・ルイスの未完成稿を、配偶者のルースが、リグダンという助手を得てまとめたものである。ルイスはイリノイ州立大学の人類学の教授であり、キューバの前にプエルトリコ、メキシコおよびニューヨーク市の貧困層について有名な著書を発表している。キューバの人類学研究では今も必ず参照される古典的書物である。大部の書物であるが、ほとんどはルイスたちが面接した被験者たちのモノローグをそのまま載せたものであり、著者たちの学術的な分析は、最初の80ページに集約されている。

キューバ革命は、キューバの社会構造を大きく転換させたが、とくに排除されていた貧困層を社会に統合させることに成功した点は、多くの論者が認めるところである。まだ比較的言論の自由が残っていた革命初期の時代に、その社会的統合の過程を、そこに生きた証人たちに自由に語らせることができた点で、価値は高いと思われる。証言を読むと、絶望と諦めの中にいた社会の最下層の人々が、革命後、革命組織や自発労働に参加したり、女性も就労したりすることなどを通じて、少しずつ自尊心を育てていく様子が理解できる。他方、マチスモや人種差別は変化していないこと、また革命初期の熱気の中ですら、貧困層の人々が、自暴自棄な態度や暴力などの負の連鎖をなかなか断ち切れない様子がうかがえて興味深い。

ルイスはスラムで話した数十人の住民全員が、革命新政府に対してまったく悪口を言わず、スラム再開発のために新しい住宅、学校、保育所が建てられていることを喜んでいる、と記している。しかし同時に、革命政府が持ち込んだ新しい価値観、たとえば労働者の権利や女性の権利、あるいは革命組織への参加の意義

などについて、貧困層が必ずしも理解していたわけではないことを指摘している。

革命政府がさまざまな利益と引き換えに国民に要求した社会的義務のために、貧困地区の住民は忙しくなった。またしっかりした構造の住居を政府が用意したおかげで、隣人同士の接触も減少した。このため、貧困地区の社会がそれまで持っていた自立的な横の関係が希薄になり、人々は革命的自由と引き換えに別の種類の自由を失ったと感じていたと指摘している。つまり貧困対策に比較的無関心だった革命前の諸政権の下では、貧困そのものは解決されなかったが、政府が介入しない分、社会にある種の自由があった。革命後は、革命的価値にそぐわない文化は許容されなかったので、住民は当惑することになった。そしてその変化に適應する過程で生じる不安を和らげるために、またある程度の個人の自由を確保する抵抗の手段として、無断欠勤や浮浪など一部の旧弊を持ち続ける住民が革命後10年たっても見られたという。社会主義の一元的な価値観の下に国民を統合していく過程の、複雑な側面がうかがえる。

中心的な著者であるオスカー・ルイスは、本書の完成を待たずに死去しており、調査自体もキューバ政府の介入により中断した。そのためか、学術的な完成度は今ひとつである。むしろ、本書の主な価値は、長大な聞き取り調査の内容をそのまま読めることとあり、この内容をどう分析するかを読者が考えることができることにあると思われる。

訳者江口氏も認めているが、現在のキューバは完全に貧困を撲滅できたわけではない。とくに住宅に関しては、ハバナの目抜き通りを一步中へ入ると、革命広場近くの中心部ですら、本書の写真に示されたスラムと変わらないような家が見つかる。しかし、人種や所得によって社会が分断される構図は相当緩和されたように思われる。この点はキューバ革命の主要な成果の一つであり、その初期の取り組みぶりがわかる本書は、革命前後のキューバ社会に関心のある読者に対して、またとない機会を提供してくれるものである。（山岡加奈子）



アンソニー・W・マークス著（富野幹雄，岩野一郎，伊藤秋仁訳）『黒人差別と国民国家 アメリカ・南アフリカ・ブラジル』（南山大学学術叢書）春風社 2007年 435 + 72ページ

本書は、米国人政治学者であるマークスが、米国、南アフリカ、ブラジルを事例に、国民国家建設との関連から人種支配と差別の問題を比較政治的に分析した研究書の日本語版である。各国ごとや2カ国の黒人問題を取り上げた研究は多数発表されているが、上記3カ国を比較分析した研究は少なく、1998年に刊行された原著は、刊行直後から大きな反響と高い評価を得た。

「国家が人種を作った」と主張する著者は、本書において、エリート層の白人が国家統一を促進すべくいかに人種秩序を構築してきたかを、巻末に付記されている膨大な文献や資料と現地滞在経験をもとに、植民地時代から近年までの歴史を遡りながら詳論している。著者の論点のポイントは、国民の統一とそれによる国家の安定や経済発展を目的に、国家が公的な人種支配を強化したり、逆に非公式な人種差別を用いたのとともに、人種もまた国民国家を形成したりするという点である。

この論理をもとにした3カ国の分析を要約すると、奴隷制廃止にともなう国民国家の形成期において、北部と南部およびオランダ系とイギリス系の白人間の対立が激化した米国と南アフリカでは、支配層の結束を強め、人種および民族的に分断していた国民国家の統一と経済発展を推進すべく、白人と黒人という二項対立的人種秩序を構築する公的な人種差別が国家により法制化された。これに対しブラジルでは、国家が意図的に唱導した非公式な人種差別のための手段である「人種民主主義」が、現実には存在する人種差別を覆

い隠すとともに、国家コーポラティズムが人種問題を階級や社会・経済的問題へと還元し、黒人を底辺、混血を中間層としたより包摂的な人種秩序の構築が試みられた。そして、各国の相違の主な要因として、植民地および奴隷制時代の社会制度の違いとともに、中央政府の権力の強固さなどがあげられている。また、国家による公的かつ強制的な人種支配の有無は人種アイデンティティのあり様を大きく左右し、不平等の除去を迫る黒人の動員や抵抗を活発化したり、逆にブラジルのように「人種差別はない」と白人のみならず黒人自らにも信じ込ませたりする要因になったと分析している。

本書の人種と国家に関する関心が「上」からの関係にあるため、黒人による抗議も重要な役割を果たしたと筆者は述べているが、「上」からの詳細かつ深長な分析や考察に比べると、「下」からのそれらに乏しさを感じることは否めない。評者の専門のブラジルに関しては、奴隷制廃止前の黒人の激しい抵抗が白人エリート層の潜在的脅威になったとされるものの、それらに関する具体的な説明は見当たらない。また、3カ国すべての歴史や国内事情に精通していないと内容や文脈が難解な箇所があり、固有な専門用語などの訳注がもう少しあればより理解しやすいと感じる読者も少なくなかろう。

しかしながら、国家がいかに人種をつくり出し、そのつくり出された人種による排除を通じて国民国家がいかに形成されてきたかを解明した本書は、過去の歴史だけでなく現代社会の分析にも多くの示唆を与えてくれる。なぜなら、国家による公的な人種支配が廃止された後も非公式な人種差別は存続しているとともに、国境を越えた多様な人々の移動は現在も存在し、国民国家は絶えず自らの再編を迫られているからである。

（近田亮平）



杉山知子著『国家テロリズムと市民 冷戦期のアルゼンチンの汚い戦争』北樹出版 2007年 195ページ

本書は、アルゼンチンにおいて1976年から83年までのプロセッソ軍政期に、軍事政権により起こされた人権侵害問題を取り扱った研究書である。同軍政期に軍事政権により1万人から3万人の失踪者を出し、また左翼取り締まり名目できわめて多くの人権侵害が行われたことは広く知られている。これらの問題は、1983年の民主化以降もアルゼンチン社会に深い陰影を落とし、今なおその傷は癒えないでいる。本書の問題意識は、軍部が何故そうした人権侵害を起したかということであり、その起源および経緯について考察を行っている。

本書の特色の一つは、アルゼンチンの人権侵害問題を国際環境の変化を追いながら分析している点である。米ソ冷戦のなかで、米国の対反乱ドクトリン、またカーター政権の人権外交がどのような影響を与えたかに関して考察が行われている。他方、国内的要因としてプロセッソ軍政期にのみ焦点を当てず、第二次世界大戦後のペロン政権以降の政権、軍部や労働組合の状況を分析し、なぜプロセッソ軍政が人権侵害を犯すに至ったかを解き明かすと同時に、人権侵害の広がりを明らかにしている。さらに本書は人権侵害に対抗する市民社会の動き、および同問題に対する国際的な連帯の動きも追っている。評者の知る限り、本書はアルゼンチンのプロセッソ軍政期における人権侵害問題に関して、社会科学的手法を用いて総合的に分析した日本で初めての研究書であるといえる。

(宇佐見耕一)



山本紀夫責任編集、石毛直道監修『世界の食文化13 中南米』農山漁村文化協会 2007年 291ページ

中南米は、トウモロコシ、ジャガイモ、サツマイモ、カボチャ、トマト、ピーナッツ、インゲン豆など、世界の食卓を彩る多様な食材の原産地である。またこの地域は、先住民をはじめ、コロンブス到着以降植民・移住してきたヨーロッパ人、奴隷として連れてこられたアフリカ人、アジア系移民など、異なる出自の人々が混在して生きてきた土地であるため、それぞれの民族の食文化が混じり合い、世界でも類をみない多様性が形成された。

本書はこのような中南米地域の食文化の特徴を紹介し、「食」を切り口に、民族の文化を読み解くことを目的としている。

全5章で構成される本書は、第1章で中南米全体としての食文化の特色を概説している。山本によれば、中南米は、トウモロコシを主食とする中米、ジャガイモなどイモ類を食し、独自の貯蔵方法を発達させたアンデス高地、マニオクを主作物とするアマゾン川流域の熱帯雨林地帯という三つの文化圏に大別できる。そしてこの三つの食文化は、古代から交易を通して混じり合い、変化してきた。第2章では、コロンブス以前と以降の食文化の変容に焦点が当てられ、第3章では、中南米諸国の食習慣の状況が、各国に長期滞在した経験を持つ地域研究者たちによって語られている。同章から、元来同じ食文化圏に属していた近隣諸国で、植民地支配された宗主国の違いなどのさまざまな歴史的経緯により、異なる食文化・食習慣が形成されてきたことがわかり、興味深い。第4章では、チチャ酒やテキーラなど、各地域特有の酒文化が、第5章ではブラジル日系人家庭の食生活の歴史が紹介されている。

本書は、「世界の食文化シリーズ」全20巻の第13巻にあたる。他の地域と読み比べ、中南米の食文化の特性について再考してみるのも面白いのではないかと。

(村井友子)